

# 東京バッハ合唱団 月報

[第549号] 2008年3月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732  
E-mail: bachchortokyo@aol.com http: //www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.549

March 2008

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 救いと滅び

聖書を中心に

森井 眞

人間も動物であり、まず大事なものは他と同様、「食う・寝る」である。太古、その「食う・寝る」をなにより強く脅かしていたのは、おそらく飢饉、大災害、ペスト病等をもたらす大自然と、他の人間や野獣の暴力、つまり自分をとりまく不可解な世界だった。滅びず、救われる道は、その世界を超えたもの、超越者に頼るよりほかなく、そこに宗教が生まれる。

しかし宗教は、人類が苦しんで生きつづけ、大自然から、世界から、多くを学ぶにつれて、単に「食う・寝る」にとどまらず、心のうちなることも含めて、より深められ、人間が人間であることの根拠、実存全体にかかわる問題となっていった。こうして古代人のつくった宗教のいくつかは、今も人類に重いことばを語りつづけ、それをもとに生れる優れた文化・芸術は、時代を超え、信じるか信じないかさえ越えて、人の魂に、深く、強く、語りかけてくる。

古代、キリスト教は聖書を正典と定めたが、やがてローマ教皇をキリストの後継者、地上における神の代理人、教えに関しては無謬、と信じて戴くカトリック教会は、自己を絶対化し、ときに聖書から離れ、ときに活力を失い、ときに過ちをおかしても、他者の批判をいっさい許さなかった。

聖書を神の言（ことば）と信じ、そこに戻ろうとした宗教改革者らは教会から排除された。カルヴァンも聖書を神の言と信じ、ルター同様「信仰の人」だったが、彼はまた「理性の人」でもあった。理性も神の賜物であり、それを重んじ、活かさねばならない、と。カルヴァンは神の言なる聖書を正確に理解すべく、理性をはたらかせ、当時おこってきた言語学、歴史学、神話学等の学問を熱心に学び、その成果を最大限にとり入れようとした。

ところで、聖書に関する学問は、20世紀以降、格段に進歩し、聖書の各書がいかなる思想の持ち主により、いかなる資料をつかって編纂されたかが語られている。聖書も人間の書いた書物である。それを、貴重な学問研究の成果を無視し、個々のことばを機械的にそのまま神のことばとして絶対化して、それに縛られようとする人々は、神の賜物である理性を軽んじ、みずからを痴呆化するものであろう。

「救い」とは何か。「滅び」とは何か。

それは、私たちひとりひとりが、古代でなく、現代世界のただ中で、大宇宙のただ中で、世界を自分の目で凝

視し、自分の頭でものを考え、心の眼を澄ませて生きながら、私たちが受け継いだ豊かな人類の文化遺産 むろん聖書をふくめて を手がかりに、自分自身の人生をとおして、めいめいその答えを探していかなばならない、各人に問いかけられている重い問いなのであろう。

(団友)

この稿は、下記の座談会「地獄と天国」の主題に関連して、ご寄稿をお願いしたものです。

筆者の森井眞氏は、歴史家（フランス宗教改革史専攻）著書に『ジャン・カルヴァン ある運命』（2005年・教文館）など。

当合唱団では、毎年7月に、ささやかな創立記念の懇親会をおこなっていますが、今年は、聖書学者の上村静氏を囲んでの座談会を予定しています。上村氏には「地獄と天国」と題しての発話をお願いしました。

バッハのカンタータやオラトリオは、ご存知のとおり、キリスト教会の礼拝のために作曲されたものですから、テーマはつねにキリスト教信仰そのものです。それにもかかわらず、遠く、時代も文化の背景も異にして、現代のわれわれ日本人の心をとらえ、この合唱団にも多くの参加者が集まるのは、バッハ音楽の質のきわだった素晴らしさに加え、歌詞に盛られたメッセージの内容に、信者、非信者を問わず普遍的に、聞くもの、歌うものの魂に深く訴えるものがあるからに違いありません。

「枠」を超えることによって、いろいろなものが豊かになります。座談会では、たとえば聖書は、滅びる者と救われる者をどのように定義してきたか、などに触れながら、宗教の「枠」を超えて、普遍を見つめてみようとおもっています。

合唱団創立46周年記念懇親会（座談会・軽食あり）

発題「地獄と天国」上村 静氏（団友・聖書学専攻）

[日時] 7月7日（月）18:30-20:30

[会場] 目白聖公会

[会費] 1,000円（軽食代とも）

ぜひご予約ください。またこの日は、後援会員、団友、旧団員の方々との交流の機会でもあります。演奏会にいらしても、なかなか直接お目にかかれなないので、近くからも、遠くからも、この日、一堂に会してお話し合いができるのを期待しています。

[新刊紹介]

渡辺利雄著『講義 アメリカ文学史』(全3巻)

大村 恵美子

研究社創立100周年記念出版として、2007年12月25日、このぶ厚い3冊の本が出た。

アメリカで最初に大部の「アメリカ文学史」が出版されたのは1917-20年のこと(Cambridge)、つづいて1948年、第3が1988年(Columbia)で、これら3点が本国での代表的なアメリカ文学史だという。日本では、斎藤勇『アメリカ文学史』(1941年)、大橋健三郎・斎藤光・大橋吉之輔(編)『総説アメリカ文学史』(1975年)があり、いずれも30年前後の間隔をおいての上梓。この本は、それに続くものとして、過去20年間に東大英文科でなされた著者の講義録を中心に、全3巻合計1400ページほどを一人でまとめた、まさに画期的なものようである。

1958年に学部卒業、1995年に定年の最終講義をおこなった著者・渡辺利雄氏は、アメリカ留学の時期をはさんで、一貫して東大英文科で研究・講義をつづけてこられた。大学院時代に学友同士で結婚したのが、私の実妹の渡辺淳子で、ちょうど合唱団発足と時を同じくし、出来たての練習場にも、ふたりで顔を出したこともある。それ以来、ひとりの人間が学者としてこれだけの内容を摂取・蓄積し、学生相手の講義を完成させて、こんなにrippana著作をつくりあげたことには、驚嘆を覚える。

\* \* \*

著者の最大の武器と魅力は、その文章の素直なわかりやすさにあると痛感した。1冊が数百ページの、ぎっしり字のつまった紙面に、一見、躊躇をおぼえるが、読み始めたとたん、次ぎに次ぎにと気持ちがひかれてゆく。

アメリカという国自体の歴史がやっと400年、そこに生まれた文学は、「過去の伝統の欠如によって成立する未来と夢の文学」といわれる。偶然にも、暮れから正月にかけて、私は古事記と万葉集を、解説書に手引きをされながら、すこし丹念に通読してみた。日本の歴史は、400年のアメリカ(合衆国)と比べて、なんと古いことだろう。私のなかでは、小学校の先生にみちびかれて味わった、素朴かつ繊細で、生き生きした万葉時代の人びとの出会いにはじまり、ついで戦中の「大君の醜(しこ)の御盾」的な忠君愛国の臣民性に反発を感じた時期をへて、また現在ふり返ってみると、いちばん偉い天皇でさえもあばら家に生きて、「大宮」にも漁師や農民の騒ぎが聞こえてくるような、親しみぶかい国柄だったことがわかる。

一方、アメリカについては、私たちは複雑な思いを蔵している。戦時中は、英米ものはみんな禁止という指導者の愚かしさに立腹し、また戦後は、占領された卑屈さ、世界のトップリーダーを気取るアメリカへの反感、暴力ですべて片づけようとする野蛮さへの蔑視等、とくにイラク侵略後は、世界的にも嫌米感がひろがった。

そんなアメリカの、経済・軍事に偏した印象とは別に、アメリカ人の心の内面性を知るには、文学になじむのがよい。古事記・日本書紀の登場人物の心を、万葉集の歌が生き生きと伝えてくれるのと同様に、400年のアメリカの出来ごとを、その文学が裏打ちしてくれる。この懇切丁寧な文学史は、そのために大きな貢献をしてくれるにちがいない。

\* \* \*

東大の教室に通っているつもりで、1回3章ずつ(全88章)できれば起床ごとに、読みつづけてゆき、アメリカを知り、アメリカ人に親しみをおぼえ、彼ら愛するようにさえもなれたらと期待する。渡辺氏は、無類の公平さで、アメリカを善意で紹介してくれるように思われる。一国突出のアメリカの存在に、重苦しさをおぼえていた生活から、隣人としてつきあえる仲間だと知れば、毎日がどんなに軽く、たのしくなることだろう。

第102回定期(6月21日)演奏曲目 歌詞と解説

カンタータ第67番《留めよ心に 主イエスを》  
»Halt im Gedächtnis Jesum Christ« BWV102

1. 合唱

留(と)めよ 心に 主 イエスを  
よみがえりし 勝利の主

(テモテへの第2の手紙2:8)

2. アリア(テノール)

わが イエス 生くれば  
何を 怖れん  
信仰は 主の 勝利 知りても  
心 おののく  
救いよ 来たれ

3. レチタティーヴォ(アルト)

わが イエス なれば 死の毒  
陰府(よみ)の 病いをもて  
ああ 悩み おそれしむるや  
主は われらに 備えたもう  
この ほめ歌を

4. コラール

晴れの 日 あらわる  
よろこび 尽きせじ  
主 いま 勝ちたもう  
敵(あだ)は みな 囚わる  
アレルヤ

(Nikolaus Herman „Ershienen ist der herrlich Tag“ 1560 第1節)

5. レチタティーヴォ(アルト)

されど なお  
残れる あだ  
われには 強く 迫りて  
こころ 安まらず  
勝利 たまいし 主も

われと ともに 戦いたまえ  
ああ 信仰は すでに 知る  
平和の 主は われらに  
御業(みわざ)を 果たしたまわん

6. アリア(バス), 合唱(ソプラノ/アルト/テノール)

バス  
安らかなれ 汝ら (ヨハネによる福音書 20:19)

合唱  
さちなり! イェス とともに 戦いたもう  
あだを 鎮(しず)めたもう  
陰府(よみ) サタン 失せよ

バス  
安らかなれ 汝ら

合唱  
イェス 安きを たもう  
身も 心も とともに  
癒したもう

バス  
安らかなれ 汝ら

合唱  
おお 主よ  
死に うち勝ちて  
至らしめたまえ なが み国に

バス  
安らかなれ 汝ら

7. コラール

平和の 君 イェス  
まことの 人  
つよき 助け主  
生にも 死にも  
ただ イェスの  
名もて  
われら み父を 呼ぶ

(Jakob Ebert „Du Friedefürst, Herr Jesu Christ“ 1601 第1節)

この曲については、個人的に強い思い出がある。

1981年夏、シュトゥットガルトのバッハアカデミーで、指揮の講習を受けてみた。全期間に演奏する何十もの曲の中から、いきなり指名されて、全受講者が、合唱、アリア、レチタティーヴォなどを順に指揮させられる。私が最初にあてられたのが、このBWV67の第6曲、合唱つきバス・アリアだった。

始めから通して最後までゆくと、リリング氏が「あちこちで止めて、いろいろ注文を出していいのですよ」と言われたが、「あまりにもきれいなので、止める気になれなくて…」と答えると、実験台となって演奏している合唱やオケから、そうでしょう!と言わんばかりに、満足そうな笑いがあがった。バッハの全カンタータを熟知しているゲビンガー・コントライのメンバーが、一日中、やたらとストップをかけられて、いろんな指揮受講生たちから些細な注文を出されつづけて、内心うんざりしたところもあるように、私には思えたものだった。(大村恵美子)

## 解説

大村 恵美子 (訳詞とも)

初演：1724年4月16日(復活節後第1日曜日)。

これは、ライプツィヒのカントルに就任したバッハにとって、最初のイースターの時期にあたる。前年の1723年5月22日にライプツィヒに移住してきたバッハは、さっそく次週5月30日(三位一体節後第1日曜日)に、カンタータ第75番《貧しき者は食し》をもって、礼拝時の職務を開始した。したがって、翌1724年がライプツィヒのバッハにとっては最初の復活節で、つぎのような記録が残っている。

4月

7日(聖金曜日) BWV245《ヨハネ受難曲》初稿初演

9日(日曜日, 復活節第1日) BWV31《天は笑い地はどよめく》再演, BWV4《キリスト死に繋がれしが》再演?

10日(月曜日, 復活節第2日) BWV66《心はずめ痛みは去れ》初演

11日(火曜日, 復活節第3日) BWV134《いまイェスは生きたもう》初演

16日(復活節後第1日曜日) BWV67[当曲]初演

目もくらむばかりの、充実したイースター・プログラムであり、その最後に登場するのが、この独創性においては全カンタータ中でもとくに卓越したBWV67なのである。

編成：アルト、テノール、バス独唱と4部合唱。コルノ・ダ・ティラルシ(スライド・ホルン。現在ではトランペットが用いられる)、横型フルート(バッハのカンタータでは最初の登用。これ以前はリコーダーのみだった)、オーボエ・ダモーレ2、弦と通奏低音。

第4曲コラールを中心に、レチタティーヴォ、アリアを対称的に置き、第1曲合唱に匹敵するか、それ以上の重みを第6曲合唱つきアリアにもたせる。整然たる配置。

イェスが歴史上の一人物から、救世主キリストとなったのは、十字架上の刑死後復活したとされる、神の啓示に導かれた使徒たちの証言によるものである。

敗北の色濃い信徒の群、敗残兵のように惨めにうずくまっていた弟子たちに、「平安がお前たちにあるように」と呼びかけて親しく現れた復活のイェス。「平和の君、主イェス・キリストよ」と応答して、共に戦ってくれる最強の戦士の出現に躍り上がる弟子たち。

イースターのカンタータの一つではあるが、あたかも戦場であって援軍の到来を迎えた一部隊のドキュメントのように、なまなましい生命力にみちあふれている。(大村著『バッハの音楽的宇宙』p.64)

### 1) 合唱

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイェス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」(第2テモテ2章8節)

勇壮な16小節のフルオーケストラ前奏のあと、合唱では第1主題(留めよ = halt の長い持続音に始まる)と第2主題(よみがえりし勝利の主, 上向8分音符でよみがえり を描写)とが順次にあらわれ、あたかも

戦うひとりひとりの心に肝要の戦陣訓を刻みこませて、戦場に送り出す場面のようなものである。

## 2) アリア (テノール)

イエスの甦りをあらわす上向動機と、それを知ってもまだ恐れおののく心をあらわす下向動機 (ため息音型) とが交錯して、使徒たちの、復活したイエスとの出会い直後の正直な反応を伝える。オーボエ・ダモーレのソロは、のちにフルートに変更された可能性がある。

## 3) レチタティーヴォ (アルト)

信頼を寄せようと主に歩みよる心の揺れ動き。通奏低音のみ。

## 4) コラール

フルオーケストラと合唱とで、アルトの恐れを吹き飛ばすような、勢いをもった勝利の宣言。全曲の中心に配置される。

## 5) レチタティーヴォ (アルト)

コラールに励まされ、最強の勇士たる復活のイエスが味方につき、平和をもたらすことに確信をいだいて、主に共闘を懇願する。

## 6) アリア (バス) と合唱 (ソプラノ/アルト/テノール)

事実上、カンタータ全体の頂点をなすのがこの曲である。戦場のただなかにあるイエス自身の親しい呼びかけ安らかなれ 汝ら の真実さ。

この日の福音書章句 (ヨハネ 20 章 19-31 節) では、この呼びかけは 3 回記されている。

「一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおるところの戸をみな閉めていると、イエスがいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。(19 節)」「弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに言われた。「安かれ。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもまたあなたがたを遣わす。(20, 21 節)」「8 日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた(26 節)」「イエスは彼[トマス]に言われた。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」(29 節)」

イエスの声を歌うバス (4 分の 3 拍子) は、よき羊飼いをあらわすように、木管 3 重奏 (フルート、オーボエ・ダモーレ 2) を伴い、安らかなれ 汝ら と、ゆったりとした持続音で 14 回呼びかける。この 14 は周知のとおり、B A C H 自身の名の数 (2+1+3+8) で、このことでイエスの呼びかけに応答する自分の姿を、バッハはそこに込めているのだろうか。

バス独唱と交互に 3 回歌われる合唱 (4 分の 4 拍子) は、弦合奏の 16 分音符、32 分音符の疾走するような戦いのパッセージとともに、確かな援軍を得て、はげしい戦いを勝ち抜いたのちの、神のみ国にいたる希望へと、心を収斂させ、鎮めてゆく。

## 7) コラール

第 4 曲と同様、4 声単純コラールだが、もはや戦いのあともなく、まったき平和のうちに、神への信頼を謳歌して終わる。

<了>

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 12>

## カンタータ第 39 番 (あたえよパンを 飢えたる者に)

「天にありては星、地にありては花、人にありては愛、これ世に美しきもの最 (もっとも) ならずや」とは、明治期の文芸評論家・高山樗牛の言葉である。このカンタータで歌われる内容は「人にありては愛」にあたるのであろうか。まず自分が神から深く愛されていることを知り、その自分を愛するように隣人を愛する。これは聖書で語られるイエスの言葉であり、彼の生きたこの地上での生活そのものであった。

バッハは、1726 年 6 月 23 日 (三位一体節後第 1 日曜日) に、このカンタータを、礼拝における説教の前後に分けて、2 部構成で演奏した。礼拝で用いられた聖書箇所はルカによる福音書だが、その中心的内容の語られているイザヤ書の言葉をモチーフに曲を展開し、最後はのびやかで、天使の呼びかけのようなコラールで曲を閉じる、壮大な隣人愛のカンタータとなっている。

「飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙のように射し出で、あなたの傷は速やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る」(イザヤ書 58:7,8)

新約聖書からこの内容を読むとき、ここではイエス自身の姿が語られているように思える。イエスは十字架にかり、自らの体を人の飢えた魂に裂き与え、貧しく病むものを懐に招き入れ、助けを惜しかなかった。そしてイエスの傷は復活により神の栄光に変えられ、その栄光は人のしんがりを守っている。壮大な隣人愛のドラマである。このカンタータを聞いてまず私の眼に浮かんだのは、想像を絶するほど人を愛したイエスの姿であった。

教会では今、受難節を過ごしている。昨年 3 月《マタイ受難曲》を演奏したように、イースターまでの間、イエスの苦しみを思い、自らの悔改めと罪の赦しを祈る期間が受難節である。この曲は三位一体節に演奏されたもので受難節とは直接関係ないが、想像力を膨らませてくれるこのカンタータの魅力に、ため息が出る。

当 CD シリーズ第 5 巻では、内容を実に見事に歌いこみ表現している合唱は圧巻であるし、それぞれのアリアも味わい深く、完成度の高い演奏となっている。早朝にこの曲を聴いたのだが、一日が実におちついた穏やかな滑り出しになったように感じた。ぜひ手に取っていただきたい 1 枚である。

(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 5 巻] に収録。S 日比吉子, A 田中奈美子, B 渡邊明, 大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団, 東京カンタータ室内管弦楽団。1993 年録音 (第 73 回定期演奏会)